日本におけるノヴァーリス受容

若松　美祐

はじめに

ノヴァーリスはドイツの初期ロマン主義文学運動における代表的な人物のひとりである。その生涯は 29 年と短く、遺された作品の数は多くない。生涯における出来事や作品のモチーフなどから、ノヴァーリスは天才的、あるいは神秘的な人物といったイメージを伴って語られることが多い。

こうしたイメージが形成された要因として、死後フリードリヒ・シュレーゲルとルートヴィヒ・ティークの手によって 1802 年に編纂・出版されたノヴァーリス著作集による影響が挙げられる。この著作集には一部の作品が収録されていなかったほか、思想や思考をつかむ上で重要な『断章』の大部分が削られるなど、恣意的な編集が行われた形跡がある。また著作集の第 3 版以降に収録されたティークによる評伝『ノヴァーリスの想い出』(1815)の中で、ノヴァーリスが神秘化された存在として描かれていることも挙げられるだろう。Fr. シュレーゲルとティークの手によって作り上げられたノヴァーリス像は、1901 年にハイルボルンがノヴァーリス自身の手稿に基づいて作品を年代順に配列した批判的な新版の全集を出版し、現実的な視点を持った勤勉な人間としてのノヴァーリス像を提示するまでのおよそ 100 年にわたり、改められることはなかった。

日本におけるノヴァーリス像もまた、受容の初期にあたる明治 20 年代に Fr. シュレーゲルとティークの編集したノヴァーリス著作集から多大な影響を受け、それが継承される形で広まっていった。日本におけるこの神秘的・ロマンチックなノヴァーリス像は、ドイツで 1901 年のハイルボルン版、1907 年のミノール版、そして 1929 年のクルックホーン版といった批判的なノヴァーリス全集が出版され、また政治など他分野との関わりの中でその人物像に対する認識が改められ続けてもなおかなりの部分が固持されたままであった。

日本でノヴァーリスが語られるとき、特に強調されてきたのはノヴァーリスの短命さと最初の婚約者ゾフィー・フォン・キューンとの関係である。ゾフィーとの恋愛・死別がノヴァーリスを詩人として開花させ、その短い生涯を神秘的で特別なものにしたという見方だ。ノヴァーリスが日本の文学界の中で確かな場所を築き、その作品が繰り返し翻訳され、語られて来た背景には、このイメージがたしかに大きな役割を果たしている。形を変えて神秘化・理想化されてきたゾフィーの物語からノヴァーリスの作品が解放されるには、昭和 50 年代を待たねばならなかった。本論文ではそうした日本におけるノヴァーリスが輸入された最初期にあたる明治 20 年代から平成 20 年代までのノヴァーリスに関する記述を引用・検討することで日本におけるノヴァーリスの受容史についてまとめ、その変遷を追う。[1]

1.　明治期のノヴァーリス受容[2]

日本で最初にノヴァーリスの名が出るのは明治 23（1890）年の『日本評論』12 月号に掲載された**棟居岐峯**の「経国家」である。当時はまだハイルボルン版の全集が出版されていなかったため、この段階ではティークと Fr. シュレーゲルによって作り上げられた神秘化されたノヴァーリス像がそのまま日本に輸入されたと考えられる。[3]

ついでノヴァーリスの名が現れるのは**森鷗外**が発行していた『志がらみ草紙』の明治 24（1891）年 5 月 25 日第 20 号に掲載された「鷗外文話」である。[4]「独逸の詩人は何を書きても碧しと。夫は其例にとてノワアリスの『碧華』、チイクの『フアンタアゾス』など引いでぬ。」[5]という、ノヴァーリスとティークに言及する記述がある。

---

[1] なお本論は 2014 年度筑波大学比較文化学類提出の卒業論文「ノヴァーリス『夜の讃歌』における第六讃歌「死への憧れ」の位置付けについて」の第一章「ノヴァーリスについて」と第二章第一節「これまでの日本における『夜の讃歌』の評価」を再構成したうえで、それ以後発表された書籍・論文について加筆を行ったものである。

[2] とりわけ明治初期のノヴァーリス受容に関する文献情報は、今泉文子『鏡の中のロマン主義』（勁草書房、1989）と同『日本におけるノヴァーリス研究文献』（日本独文学会 編 ドイツ文学（通号 70）1983、180～193 頁）の記述に負うところが大きい。

[3] 今泉文子『鏡の中のロマン主義』勁草書房、1989、193 頁。

[4] 同書 193 頁。

[5] 同書 193 頁。なお本論文では引用に際し、原文の旧仮名遣いは残し、漢字は現在の当用漢字に改めた。以下の引用でも同様。

明治20年代後半から徐々にノヴァーリスの名が文学雑誌などに登場する機会が増える。明治27（1894）年1月26日発行の『早稲田文学』に**みすゞのや（金子馬治）**の「ショオペンハウエル（完結）」が掲載される。この中で金子はショーペンハウアーの哲学に触れつつ、それが当時のロマン派の思想と重なっていることを指摘し、ロマン派の代表格のひとりとしてノヴァーリスの名を挙げている。[6]

また、**坪内雄蔵**や**亀木正之助**などにもノヴァーリスに関する記述があることから、明治20年代後半にはドイツ・ロマン主義とノヴァーリスがある程度知られていたことが窺える。しかしこれらはどれも単に作者名や作品名にふれているに過ぎず、ロマン主義ならびにノヴァーリスの本格的な研究と紹介が始まるのは明治30年代後半に入ってからのことである。[7]

明治30年代後半になると主に『明星』や『帝国文学』といった雑誌でそれまでの単なる翻訳・紹介の対象から研究対象としてノヴァーリスを扱う動きがみられるようになる。この時期に書かれたノヴァーリスの作家論に、**藤代禎輔**の「ロマンチックの詩人ノワリス」がある。これは『明星』明治37（1904）年2月号に掲載されたもので、ノヴァーリスの詩作品の特徴をその生涯から読み解く試みがなされている。その中の「ノワリスの詩を作るや其材を自己の経験したるものにあらざれば取らず」[8]という一文には、ノヴァーリスを論じる上での藤代の姿勢が顕著に現れている。ノヴァーリスの経験と作品を同列に扱い、作品よりもむしろ作者の生涯に重きを置く姿勢は、これ以降の時代でも日本におけるノヴァーリス受容を基本的に貫くものとなってゆく。

翌明治38（1905）年、藤代の教え子であった**山岸光宣**が『帝国文学』5月号に「詩人ノワーリスを論ず」を掲載するが、ここでもノヴァーリスの作品より生涯のほうが詳細に述べられている。ノヴァーリスの生涯に関する部分は藤代のノヴァーリス論と酷似しており、特にゾフィーとの出会いと死別を題材に『夜の讃歌』を書いたという主張についてはほとんど違いがない。なおゾフィーの死と『夜の讃歌』をはじめとするノヴァーリスの作品との関係は、この後の時代でも繰り返し強調される傾向にある。

また山岸はノヴァーリスの作品と生涯との関係について「而して彼が思惟、彼が運命、

---

[6] 同書194頁。
[7] 同書196頁。
[8] 藤代禎輔『ロマンチックの詩人ノワリス』東京新詩社、1904、『明星』辰歳第二号 66頁。

彼が境遇は皆彼が詩歌の風格を備ふ。」[9]と述べている。山岸はノヴァーリスを

> 而して彼等にありては予感の活動盛にして、しかも其予感なるものは、青春の暮るゝと共に消滅するが如く、身亦自ら夭死の薄命をたどり、流星の如き彩光を後にのこして天の一方に逸するを常とす、而して詩人ノワーリスはまた斯の如き人なりしなり。〔…〕而して預言者的分子はまた其容貌にも著しく顕はれ、洗者ヨハネにいたく似通ひたる彼は其額雪白にして大理石の光彩を宿し、褐色の眼よりは天上の光を放ちしとぞ。[10]

と讃えている。ここで山岸はノヴァーリスを洗礼者ヨハネに例えているが、これはティークの„*Biographische Notizen über Novalis*“[11]に影響を受けた表現と思われる。[12] このことから山岸は少なくとも第 3 版以降のティークによる„*Biographische Notizen über Novalis*“が付されたノヴァーリス著作集に何らかの形でふれており、ティークの描いたノヴァーリスのイメージを引き継いでいることが窺える。

受容の初期にあたる明治 20 年代から 30 年代、藤代と山岸のノヴァーリス論やそれに前後するノヴァーリスの紹介と研究は、日本におけるロマンチックで神秘的な天才詩人としてのノヴァーリス像を印象づけ、同時にノヴァーリスの生涯から作品を見るという研究の方向づけをも行った。この時点で既にノヴァーリスの作品と生涯とは切り離しがたいものとなっていたのである。

明治 36（1903）年 12 月号の『帝国文学』に掲載された**山岸求園**による『夜の讃歌』の抄訳も、そうした傾向の中にある。ここで求園は『夜の讃歌』を「月影のおぼろなるに憧るゝ独逸「ロマンティク」派の預言者の名あるノファアリスが十三にしてうせし恋人の墓のべになりし夜の讃歌すべて六。」[13]と紹介しており、山岸が『夜の讃歌』の執筆動

---

[9] 山岸光宣『詩人ノワーリスを論ず』帝国文学会、1905、『帝国文学』明治 38 年 5 月号 2 頁。

[10] 同書 2〜3 頁。

[11] Novalis, *Novalis Schriften Erste Theil*, Armbruster, 1820.

[12] 同書 p.31. „sich Novalis in der Menge, dem geübteren Auge aber bot er die der Schönheit dar, Der Umriß und Ausdruck seines Gesichtes kam sehr dem Evangelisten Johannes nahe, wie wir ihn auf herrlichen großen Lafel von A. Dürer sehen, die Nürnberg und München bewahrt.“

[13] 山岸求園『夜の讃歌』帝国文学会、1903、『帝国文学』明治 36 年 12 月号 31 頁。「ロ

機をただゾフィーの死のみに求めていることがわかる。また、ここで注意すべきは、求園によって訳されているのが『夜の讃歌』の中でも特にゾフィー体験との関連が強いとされる第三讃歌だけであるという点である。日本で初めて訳出・紹介された『夜の讃歌』が第三讃歌であったことは、日本におけるノヴァーリスの作品受容の方向づけに大きな役割を果たしたと考えられる。

2. 大正期のノヴァーリス受容

大正期には研究の土壌が整備されていき、批判的な立場で編集されたミノール版やクルックホーン版の全集のほか、様々な研究書がドイツで出版され、それが日本でも普及していく。こうした流れの中で、大正 15（1926）年に東京大学独文学会の『独逸文学』第一輯が刊行される。ここに掲載された**高尾國男**の「ノヴーリスの『夜の讃歌』に就いて」は、日本における最初期の作品論の一つである。論の中で高尾はノヴァーリスの生涯について考察しているが、藤代と山岸に比べてかなり異なる態度をとっている。特にゾフィーとの関係についてはハイルボルンらの考察を参考にしながら

> 更に適切にいへばそは当代の多くの人々に依って伝説化され、浪漫化せられたる恋愛に外ならない。即ち永い時間の経過と共に完全な形となって、今日まで伝はってきた浪漫的伝説に過ぎない。それ故愛人の死後詩人の精神に宿り、折にふれ詩人を霊感せしめた神話的女性に対する愛惜の情や、愛人の死を悲しむ心の中に燃え立った諸々の空想は、曾て地上にあったゾフィーそのものゝ形相に対する愛から湧き出たのでなくて、寧ろ詩人自身の詩的空想力の無限なる能力に負ふてゐたからであらう。〔…〕ゾフィーに対する地上の愛に於てはたゞ現世的影像を見たに過ぎないで、彼の求むる永遠の像としての女性は、たゞ彼の情操の中に深く蔵められてゐたものであらう。[14]

マンティク」と「ロマンチィク」の表記は原文に従った。

14 高尾國男「ノヴァーリスの『夜の讃歌』に就いて」、東京大学独文学会編『独逸文学　第一輯』、郁文堂書店、1926、100～103 頁。

と述べており、ノヴァーリスとゾフィーとの恋愛は長い時間をかけて周囲の人々によって理想化されたものであり、またゾフィーそのものではなくノヴァーリスの心に映ったゾフィーの像が神秘的であったと解釈している。その上で高尾は

> 然し空想の恋愛の対象であったゾフィーが一旦病魔に襲はれ、不幸にも命旦夕に逼ったとき、ハルデンベルグは未だ知らなかった愛を一時に強く感じ初めた。換言すれば健康なるゾフィーでは到底与へ得なかったものを、病める愛人が初めてこれを与へ得たといひ得やう。[15]

と、この恋愛を一種特別なものに押し上げたものはあくまでもゾフィーの病気であったと述べている。これはノヴァーリスやゾフィーそのものが神秘的であったとする藤代・山岸とは異なる立場である。

ただし、ノヴァーリスの生涯に関してはこうした立場をとった高尾も、『夜の讃歌』の執筆動機については「愛人の死と、死を悲しみ悼む心情」とに求めている。[16] 高尾はウンガーの『ヘルダー、ノヴァーリス、クライスト』[17]）を参考に、『夜の讃歌』をその思想面から読み解こうと試みている。ここでは特にノヴァーリスの思想とヘルダーの思想との関連が強調されているが、高尾はウンガーの考察を

> 惟ふに詩作は生命の直接表現である。外から与へられた素材の集積は時には詩作の内容を豊富にし色づけることあるも、これのみを以って詩の内容となることは偉大なる作品に於ては到底あり得ない。それ故詩作の動因を外的にのみ求めて、これを内より自ら奔騰する生命の流れの中に見出さない評家は、徒に作品に及ぼした先人の感化影響のみに論及して、やゝもすれば作者自身のもつ確信と疎隔せんとする弊に陥るであらう。[18]

---

[15] 同論文 103 頁。
[16] 同論文 108 頁。
[17] Rudolph Unger, *Herder, Novalis und Kleist, Studien über die Entwicklung des Todesproblems in Denken und Dichten von Sturm und Drang zur Romantik,* Verlag Moritz Diesterweg,1922.
[18] 同論文 112 頁。

とやや批判的に見た上で、

> 制作は内より湧くものであって、決して外より流れ込むものではない。ノヴァーリスの場合に就てのみこれを言へば、自然研究、哲学研究に没頭してまさに詩作の迷路にあった彼に、愛人ゾフィーの死は如何に決定的な衝動を与へたであらうか。ウンゲルの言ふ如くヘルデルの影響も、「希臘の神々」に現はれた思想の感化も、「宗教論」の情操も、ティークとの交遊も、更にその他の浪漫派の詩人哲学者の感化もヤング（Young）の「夜の思」も見逃がすことは不可能であるにせよ、「夜の讃歌」の成立上愛人の死を何物よりも先に度外視することは出来ないであらう。[19]

と、ノヴァーリスの創作の動機を何よりもまずノヴァーリス自身の内面に、そして内面に影響を与えたゾフィーの死に求めている。別の箇所でも高尾はノヴァーリスのゾフィーとの死別を「神聖な受難」と表現しており、この体験がなければノヴァーリスの世界観や宗教観といったものは成立し得なかっただろうと述べてもいる。[20]

ゾフィーの死そのものがノヴァーリスに『夜の讃歌』を書かしめたとする姿勢は、前節で触れた藤代や山岸光宣と類似している。ここで重要なのは、高尾が『夜の讃歌』成立の動機についてヘルダーの影響やティークらとの交流などといった他の要因を挙げつつも、結局明治期に藤代や山岸が述べていたような、ゾフィーの死こそが直接の動機であるという考えに立ち返っている点である。このことは、高尾がノヴァーリスの生涯については「浪漫的伝説」にすぎないという批判的な見方をしていただけに、いっそう特異に思われる。

3.　昭和期のノヴァーリス受容

昭和 4（1929）年に**吹田順助**によって翻訳されたブランデスの『十九世紀文学主潮史』においてノヴァーリスは「肺病患者の肉感性及び超世的憧憬を有せる四海同胞派（ヘルンフーテル）

---

[19] 同書 112 頁。
[20] 同書 122 頁。

の信徒――ノヴァーリス」と評されている。[21]「肺病」や「超世的憧憬」といった表現はブランデスのものだが、これがそれまでの日本におけるノヴァーリスの繊細なイメージをよりいっそう助長する働きを果たしたことが推察できる。

昭和 6（1931）年、**飯田安**は『断片』を訳し、その「緒（ノヴァーリスについて）」において主として 1790 年以降のノヴァーリスにふれている。この断章の訳出にあたり、飯田がテクストとしてミノール版とクルックホーン版の全集を使ったことは明記されている。[22] しかし、ここでもゾフィーとの関係に重点が置かれた紹介がなされており、[23] ノヴァーリス像自体は明治 30 年代の山岸・藤代の受け取り方と比べてさほど変わらない。他方で、飯田はいち早くノヴァーリスの科学的な洞察力の鋭さに言及している。

> 科学者としてのノヴァーリスの卓越性について驚かされた。〔…〕A 君の兄さんは科学者だ。〔…〕私はノヴァーリスの科学的断片の一つに、「結晶体は電気の始源をもち得ないかしら？（断 678）」というのがあるのを思いだしたので「結晶体が電気の起源をもつことがありますか？」と聞いてみた。〔…〕「なぜ、こんな物理現象のことを聞くのですか？」「ノヴァーリスの断片のなかにあるのです。」「ノヴァーリスは、いつごろの人なのですか？」「ゲーテやカントと同時代の人です。」「そのころこんな現象を予想していたとすると、なかなかすぐれた科学者ですね。けれども、ノヴァーリスは芸術家だったのでしょう？」「え」と自分は答えて、彼が〔…〕また、その時代の最もすぐれた科学者の一人だったことなどを話した（これはノヴァーリスの研究家にも殆ど知られていないことであるが）。[24]

この時点では多くの研究者がまだノヴァーリスと科学的研究との関係に注目していなかったことが窺える。

昭和 8（1933）年には『ノヴァーリス短編傑作選』が出版された。これには**佐藤荘一郎**の翻訳による『夜の頌』（夜の讃歌）、『ザイースの弟子達』、『聖歌』が収録されてい

---

[21] 今泉文子『鏡の中のロマン主義』勁草書房、1989、209 頁。
[22] 同書 351 頁。
[23] ノヴァーリス『断片』飯田安訳、第一書房、1931、15 頁。
[24] 飯田安「ノヴァーリスの科学的予見性」セルパン（3）7 月号、第一書房、1931、36～38 頁。

る。[25] 佐藤はこの短編集の「解題」で、

> ノヴァーリスの短き生涯、就中、あえかなる少女ゾフィー（Sophie von Kühn）との恋は、今之を述するの要を見ない程、有名なる事柄である。ノヴァーリスのあらゆる感情及思想、之を基礎としたる彼れが文学的成果、悉く、此二つの運命――先天的の病弱及、その結果としての短命、並に、ゾフィーに対する恋、及、彼女の夙き死――に源を発する清冽なる泉に外ならない。[26]

と、ノヴァーリスの文学作品やそれを支えた感情、思想といったものはあくまでもノヴァーリス自身の短命さとゾフィーの死から生まれたものであると述べている。[27] また「ゾフィーとの恋は今之を述するの要を見ない程、有名なる事柄である」とあることから、ノヴァーリスとその作品を理解するうえでゾフィーとの関係を重要視する姿勢が広く受け入れられていたことが窺える。佐藤は同「解題」の中で、『夜の頌』を紹介するにあたり

> 一七九七年、ノヴァーリス二十五歳の三月、ゾフィーが、十四歳の春を迎へたまゝ、病の為めに此世を去った。此打撃が、ノヴァーリスの全生涯に、新しい方向を与へたことは謂うまでも無い。[28]

と冒頭で述べている。内容やその背景にあるノヴァーリスの思想を措いてまずゾフィーの死について書いていることから、佐藤が『夜の讃歌』を読む上でゾフィーの存在を念頭においていることがわかる。

また、作品の註にも何度かゾフィーが登場している。例えば第一讃歌の「厳かなる一つの面影に、〔…〕なつかしきうら若さを示す面影である」[29]という部分に付された註で佐藤は「面影は勿論愛人ゾフィーのそれである。」と述べている。しかし、いかなる理由から佐藤がこの部分の「面影」をゾフィーのものと決めたのかは不明である。もちろん

---

[25] 佐藤は『夜の頌』の訳出にあたり、アテネーウム体を採用している。
[26] ノヴァーリス『ノヴァーリス短編傑作選』佐藤荘一郎訳、外語研究社、1933、1～2 頁。
[27] 同書 1～2 頁。
[28] 同書 2 頁。
[29] 同書 7 頁。

その可能性はあるが、人間としてのゾフィーそのものと言い切れるかは疑問が残る。ノヴァーリスの生涯におけるゾフィーとの関係の強烈さにばかり目を向けてきた結果生まれた、ノヴァーリスの作品中の女性はすなわちゾフィーであろうという先入観が働いているのではないかと考えられる。

なお、明治期の記述で触れた山岸光宣が昭和 11（1936）年に新潮文庫から出版した『独逸文学概観』も、佐藤とよく似た傾向を示していることを付言しておきたい。同書の「第七篇 浪漫主義時代」において、山岸はノヴァーリスが夭折したことによってロマン派詩人としての特色を濃厚にしたと述べ、その生涯における病気の役割に着目している。[30]

それに対し、同じ年に書かれた**茅野蕭々**の『独逸浪漫主義』は、宗教や政治、理論などの様々な側面からロマン主義文学とそれに関わった人々について考察を加えている点で、単なる作品の翻訳や紹介に終わっている上記の二作品に比べて特徴的である。茅野はリカルダ・フーフの„Die Romantik“を参考にしており、茅野のノヴァーリス像はゾフィーとの関係を語る部分において山岸や藤代、飯田のそれとは異なっている。ノヴァーリスの日記などから分析を行い、ノヴァーリスを「神秘家」でありながら「一面朗らかな活動人」として捉えている。しかし茅野もまた、『夜の讃歌』については「ゾフィイの墓畔の幻想こそ彼に『夜の讃歌』（Hymnen an die Nacht）を作らせたのである。これを人は彼岸に書かれた恋人の夢と呼んでもよいであらう。」[31]と述べ、執筆動機の第一はゾフィーであるとしている。茅野は高尾同様に、一方ではごく普通の人間としてのノヴァーリスを見ていながら、一方ではノヴァーリスの作品を神秘的な体験によって生まれた特別なものとして見ている。

昭和 13（1938）年、**斎藤久雄**による翻訳本、『夜の讃歌と青い花』が出版される。これには『青い花』『夜の讃歌』といった作品とともにノヴァーリスの生涯と作品への解題が付されている。ノヴァーリスの生涯を紹介する部分において、斎藤はノヴァーリスがゾフィーの死後に自殺を企てたことと、ユーリエと結婚したこととが矛盾しているという

---

30 山岸光宣『独逸文学概観』新潮社、1936、168 頁。

31 茅野蕭々『浪漫主義の宗教観』初出『独逸浪漫主義』三省堂、1935。ここではノヴァーリス『ノヴァーリス全集　第 3 巻　研究・資料編』由良公美編、牧神社、1978、98 頁、より引用。

前提に立った上で、その理由を次のように説明している。

> 茲に我々は一見極めて矛盾に満ちたノヴァーリスの心理に逢着する。即ちゾフィーの後を追って焦れ死にをしやうと云ふ決心と、実生活上に於る勤勉努力と、そしてユーリエとの婚約と。此の到底同時には存在し難く見えるものの同時の存在を如何に説明するか。これは彼が当時既に可なり進んだ肺患を持ってゐて、精神が異常に興奮する状態にあった事を頭に置いて考へると解釈がつく様である。[32]

ちなみに、この斎藤の指摘は根拠を欠いており妥当ではない。ノヴァーリスが病を患っていたのは事実だが、そのことによって彼の二面性を説明することはこじつけの域を出ていないためである。

昭和 23（1948）年には**小牧健夫**の『ノヴーリス』が出版される。これは昭和 4 年に小牧が岩波書店の学芸叢書のひとつとして刊行した同名の著作に修正を加えた上で改めて櫻井書店から刊行したものである。小牧はノヴァーリスとゾフィーとの関係について、同書の「ノヴーリスの生涯」で

> 有りふれたといへばゾフィーにたいする恋愛関係も初めのうちは浪漫的な彩りのない、普通一様のしかもかなり平凡なものにすぎなかった。それがノヴーリスの想像中で著しく浪漫化されて行ったのは、実にこの年十一月ゾフィーが病気になってから後のことである。[33]

と述べており、大正期の高尾と立場を同じくしている。また『日記』についても

> この日記は日記文学中の異色である。非常に冷静に、少なくもさう見える調子で、自己を観察し解剖したものである。[34]
> 彼の『日記』は心憎いほどに自己を直観し、微妙な気分の移り行きをも逃さず

---

[32] ノヴァーリス『夜の讃歌と青い花』斎藤久雄訳、有朋堂、1938、 7 頁。
[33] 小牧健夫『ノヴーリス』櫻井書店、1948、49 頁。
[34] 同書 54 頁。

> に書きとめたものである。時として乾燥ともいひ得る文体で書かれた自己解剖の記録である。[35]

と述べ、『日記』はあくまでノヴァーリスが自身を冷静に見つめるためのものだったと解釈している。こうした小牧の記述と同様の記述がフーフの„Blütezeit der Romantik"（1899）のノヴァーリスを扱った章にあるため、小牧がフーフの影響を受けていることが窺える。[36] さらに、小牧の「ノヴーリスの生涯」にはゾフィー体験の記述がないこと[37]、ゾフィーの死から『夜の讃歌』の着想を得たであろうことに着目しつつ、それをノヴァーリスが個人の体験で終わらせず、人類普遍のものにまで高めた点に重点を置いて語っていることが特徴的である。[38]

小牧がティークとユストそれぞれによるノヴァーリス略伝を参考にしたことは、巻末の研究書目からわかる。小牧は本文中で

> ユストはノヴーリスの死後、詩人の小伝を書いてゐる。ノヴーリスの友人で彼の伝記を書いたものはほかにティークもあるが、自分が詩人であった彼のものは、浪漫的の詩人としてのノヴーリスを力説した点に長所をもってゐるけれども、

---

[35] 同書 60 頁。

[36] 小牧はフーフの *Die Romantik* を参考にしており、小牧のノヴァーリス像はそれまでの日本におけるノヴァーリス像というよりもフーフのノヴァーリス像を継承している。また、詩人としての側面よりもごく普通の生活を送るいち青年としての側面を強調している点で茅野と類似している。小牧の研究書目を見るとフーフの他にルドルフ・ウンガーやオスカー・ヴァルツェル、ディルタイといった名前が見られ、小牧がこれらに影響を受けて『ノヴーリス』を著したことが推察できる。
なおフーフの原文（日本語訳）は以下の通り。「しかし、そのすべては他のどの少女についても云はれうるやうなことばかりであるから、われわれにはあまり役にたたない。かの女がどんな女であつたにしても、大切なのはただ、かれにとつてかの女が何を意味したかといふことである。さうしてこのことは、かの女のうちによりもむしろかれのうちに遙かによりよく見いだされうるものがある。」（リカルダ・フーフ『独逸浪漫派』 北通文訳、岩波書店、1923、86 頁）

[37] フーフは「かれの最大の体験はゾフィー・フォン・キューン Sophie von Kühn に対する恋愛の一部始終であった」（同書 85 頁）とも書いているので、ゾフィーの扱いは小牧の方がより小さいと考えられる。

[38] 同書 96 頁。

> 事実に忠実な記録としてはむしろユストの方を選ぶべきである。[39]

と述べており、事実への忠実さという観点からティークの略伝に対して批判的な態度を取っている。また、重要なのはノヴァーリスの詩作に関して

> ノヴーリス一生の詩風の変遷は多くの人がするやうに、三期に分って観察するのが便利である。第一期はエーナー遊学以前をいふ。〔…〕第二期はエーナーでシレルに接してから以降である。〔…〕第三期は詩的覚醒以降である。〔…〕恋愛の体験がなくて恋愛を歌ふのであるから、感情の真実性と迫力が欠けてゐる。〔…〕第二期の作品になると、以前のものより内容が複雑となり充実して来てゐる。〔…〕だがこの時期でもなほノヴーリスの作として特色のあるものを探すことは困難である。はじめてそれが出来るのは第三期に入ってからで、この期の詩については別に述べようと思ふ。[40]

と、ゾフィーと出会う以前の活動に言及していることである。なおここでは「多くの人がするやうに」とあるが、「多くの人」がどのような集団を指しているのかは不明瞭である。ただし、同時期の日本におけるノヴァーリスの紹介の中ではゾフィー以前の詩作がほとんど無視されていることから、日本国内よりもむしろ海外の研究者の態度を指していることが推察できる。

翌昭和 24（1949）年に『世界文学はんどぶっく』シリーズの一冊として刊行された『世界文学はんどぶっく　ノヴァーリス』における**丸山武夫**の考察は、小牧と姿勢を同じくしている。丸山はノヴァーリスの生涯にふれつつも、あくまでその思想背景や時代状況といったものから作品を読み解こうとしている。丸山はゾフィーとの関係を語る部分で

> ノヴァーリスがこの恋愛によって味はった体験はきはめて深いものではあるが、彼にとってゾフィーの意義は、ゾフィーその人にあるといふよりも、彼の内部にあったと考へえられよう。ゾフィーが彼の眼に、純一無難な愛によって理想化

---

39 同書 43〜44 頁。
40 同書 74〜76 頁。

> された若い乙女のイマージュとして映ったことが大事なのである。青い花と化し、象徴となったことが大切なのである。[41]

と述べており、ゾフィーそのものは特別視していない。ノヴァーリスの目に映ったゾフィーの姿が神秘化されていたという姿勢は先述した小牧と同様、大正期における高尾と類似しており、高尾の姿勢が継承されていると言っていい。

しかしながら昭和 27（1952）年に出版された**原田義人**の『ドイツ文学入門』では、ノヴァーリスの神秘的な側面が強調されている。[42] 読者向けの参考文献として小牧健夫の『ノヴーリス』が挙げられており、原田が小牧の『ノヴーリス』に影響を受けた可能性は高いが、小牧の姿勢が継承されているとは言いがたい。全体的な紹介の重点がゾフィーとの関係に置かれていることも小牧とは異なっている。

昭和 29（1954）年には**片山敏彦**が『ドイツ詩集』でノヴァーリスを紹介している。ノヴァーリスの詩をヘッセの言葉を借りて「血と葡萄酒との神秘な味がする」と評し、ついでジッドの『ユリアンの旅』の言葉を借りて「百合の花のやうに輝く皮膚」を持つ「不思議な子供」こそノヴァーリスその人だと述べている。[43] 片山自身の言葉によればノヴァーリスは「二十九歳で死んだ此のドイツのアリエル、この精霊的な、あるひは妖精じみた哲学的な詩人、快活な微笑に包まれつつしかも形而上的な自殺者」であった。[44] 片山は「『夜の讃歌』はゾフィーの死の直後に書かれた一連の詩」だと述べており、ゾフィーと『夜の讃歌』との密接な関係を示唆している。[45]

ここで注目すべきは、小牧や丸山が『ノヴーリス』でそれまでに作り上げられた神秘的・幻想的なノヴァーリス像とは異なり現実に生きる一個人としての側面や冷静な視点を強調することで変化を与えたのに対し、原田・片山においてはその成果が継承されなかったのみならず、明治期における藤代・山岸の作り出したノヴァーリス像に再接近

---

41 丸山武夫『世界文学はんどぶっく』世界評論社、1949、92 頁。.

42 原田義人『ドイツ文学入門』河出書房、1952、134 頁。

43 片山敏彦『ドイツ詩集』新潮社、1954、80-82 頁。

44 同書 80 頁。

45 手稿などの研究によって『夜の讃歌』の執筆時期は 1799 年の暮れから 1800 年冒頭にかけて執筆されたとされているので片山の書いていることは誤りである。ただしこの時期はまだ『夜の讃歌』の執筆時期は特定されておらず、小牧も『ノヴーリス』で執筆時期を 1797 年 5 月以降 1800 年 2 月半ばまでとしている。

しているという点である。小牧のノヴァーリス観を象徴しているのは次のような文章であった。

> わづか廿九歳でこの世を去ったノヴーリスはその一生を青年として終った。晩年の作品を見てもなほ未だ十分に円熟の域に達してゐない。否むしろなほ青春の若々しさを失ってゐない。さうして彼の創作のほとんどすべては断片に終って完成したものはなく、その思想も纏った体系を形づくるほどに成熟せず断想として発表されたに過ぎないから、彼は断片家の名を得てゐる。それにも係らず彼の作は浪漫家のあひだに重きを成し、後代にも多くの反響を喚び起してゐるのは実にこの若々しさの賜ものである。フリードリヒ・シュレーゲルのいふ青春の明るさと感情の清さとを死に至るまで保ってゐたからである。この「若いノヴーリス」の若々しい作品にも時代の前後によって大きな懸隔がある。或る時期を境として想像力の発達の上に目ざましい飛躍がある。ゾフィーの死を体験し、ティークと識ってから後の作品とそれ以前の物とは別人の手に成ったやうな発展がある。[46]

小牧はノヴァーリスの作品が十分な円熟を見ないものだということを冷静に批判し、生涯の中で段階的に発展していったことを示唆している。これに対して原田・片山がノヴァーリスを性格づけ、あるいはその詩を論じた文章が以下である。

> ノヴァーリス〔…〕こそ、初期浪曼派の代表詩人であります。科学に熱中した詩人、哲学者、神秘家であった彼は、そのいわゆる《魔術的観念論》によって、短い生涯をただひたすら夢に燃焼しました。彼は十四歳の純真な少女ゾフィーを愛し、しかもその死に会う悲痛な経験をします。〔…〕『ハインリヒ・フォン・オフターディンゲン——青い花』(一八〇二)は、未完でありますがロマン主義とは何であるかを最もよく示す夢の小説であります。[47]

> 〔…〕この詩はまるで謎のやうに渋解であるが、幾度も読み直して形象性のな

---

[46] 小牧健夫『ノヴーリス』櫻井書店、1948、
[47] 原田義人『ドイツ文学入門』河出書房、1952、134～135 頁。

> がれに触れてそれに馴れると、まことにふしぎな美しさをこの詩は持ってゐる。〔…〕「碧いよそほひの、この世ならぬいのち」というイメージは、ノヴァーリスの「永遠の恋人」・若くして死んだゾフィー・フォン・キューンのおもかげを暗示してゐるやうだ。[48]

比較すると、原田・片山はノヴァーリスが科学や哲学に興味を持っていた点にふれながらも、作品と生涯を多分に神秘化して語る傾向があることがわかる。また小牧がティークら他のロマン派との関係にも言及しているのに対し、原田・片山はあくまでゾフィーとの関係にこだわっている。小牧に見られるような、段階的に発達していったノヴァーリスのイメージも見られない。

昭和 34（1959）年には『夜の讃歌　他三篇』の新たな翻訳が出版された。訳者の**笹沢美明**による「解説」には、ノヴァーリスの略伝、ロマン派とノヴァーリスの関係、そしてゾフィーとノヴァーリスとの関係にふれた文章が収録されている。笹沢は他のロマン派とノヴァーリスの関係にもふれている点で小牧と姿勢を同じくしているが、略伝の中心はゾフィーとの出会いと死別にある。ノヴァーリスがゾフィーの死から立ち直った理由の説明として、笹沢は「彼本来のロマンティックな性格によって考え直し」たことが原因だったと述べている。[49] しかし笹沢はその一方で

> ノヴァーリスという人物は、常識をもち、実際的なところがあり、責任感のつよい人だったし、哲学にしろ科学にしろ、よく勉強して、その文学活動と並行に持って行き、それによって創作して行った人であった。性質からして、決して威ばるとか、だらしがないとか、そういう天才肌の人ではなくて、明るくて無邪気で、それでいて、深く考える人であって、〔…〕何より心底に誠実があったからだと思う。[50]

と、ノヴァーリスの堅実な人柄といった側面にもふれている。しかし笹沢がノヴァーリス

---

[48] 片山敏彦『ドイツ詩集』新潮社、1954、86 頁。
[49] ノヴァーリス『夜の讃歌　他三篇』笹沢美明訳 岩波文庫、1956、88 頁。
[50] 同書 89 頁。

を語る上でゾフィーの存在を強く意識していることは、笹沢が「解説」の中で「恋人ゾフィーと彼の作品の関係」という項目を設けていることからも窺える。笹沢はこの項目においてゾフィーを次のような文章で描写している。

> ゾフィーが死んでから彼女はたびたびノヴァーリスの魂を動かしている。〔…〕ゾフィーは全くいわゆる現実のものではなく宗教的実在の人物だったのだろう。ゾフィーは欠点の多い、平凡な女性だったという。何より詩など理解しなかったのがノヴァーリスにとって不満だったろうが、彼は彼女の欠点をよく理解し、すべてその欠点を彼女の「自然」と「本能」に帰して、それを魅力とさえ感じている。だから、ノヴァーリスがひきつけられたのはゾフィーの姿全体から来る神々しい優美というようなものではなかったろうか？ロマン派の人たちもゾフィーを礼讃しているし、ゲーテも病床の彼女を訪ずれて、あとで褒めたというから、この若い女性には、教養程度の低い家庭に育ち、才能も未熟だったというのに、何か霊的な美しさが備わっていたにちがいない。〔…〕彼の魂の中にゾフィーが、ゲーテの『ファウスト』の最後で昇天した恋人マルガレーテ（グレートヒェン）の霊が天上でファウストを永遠にみちびいて行くように、ノヴァーリスを一つの理念として力づよく導いていたのであろう。それによって、ノヴァーリスはもうゾフィーを追って死のうとは思わず、現世にあって彼女と共に暮していたのである。こういうふうに、ゾフィーは全作品を解く鍵と言われている。[51]

小牧らがゾフィーそのものは平凡な女性で、あくまでノヴァーリスの心で作られたゾフィー像が神秘的であったと述べているのに対し、笹沢はゾフィー本人にも神々しい優美や霊的な美しさがあったと推測している。笹沢のゾフィー像は一見ノヴァーリスの言葉やゲーテが彼女を褒めたという事実から成立しているように見えるが、これは推測の域を出ない。ノヴァーリスに関わったひとりの女性の霊的な美しさとその魂がその後の作家と作品を決定したという笹沢の姿勢は、

---

[51] 同書 94～95 頁。笹沢の『夜の讃歌　他三篇』は、装丁の面でも特徴的である。表紙にゾフィーの肖像画が使用されているのだが、作者であるノヴァーリスの肖像は本文中、解説中にも一切掲載されていない。笹沢の意向によるものかは不明だが、ゾフィーが作者よりも目立つ扱いを受けている点が興味深い。

> すべての研究家の指摘するように、初恋のゾフィーの影響は全作品におよぼしていることは否定できない。小説にも詩にも彼女に対する憧れや理念がはっきり現れている。[52]

という一文によく表れている。

昭和38年に出版された『世界文学大系77 ドイツ=ロマン派集』付属の月報に掲載されている阪本越郎の『ノヴァーリスの詩と死の理念について』では、ノヴァーリスについて以下のように論じられている。

> ノヴァーリスの詩人的生涯は、消えやすい淡雪のようにはかないもの、この世の物ならぬ純潔清澄なものに思われる。
>
> 〔…〕ゾフィーとの出会いは、この天才の頭脳を狂わせた、運命的、心霊的な事件であった。一七九五年の秋には二人は婚約したが、彼女のあまりにきゃしゃな美しさ、その透き通ったような顔立ちは、見る者に或る危うさを感じさせた。彼女は死の国からの使者のようであった。しかしノヴァーリスは彼女のことを語るごとに詩人になっていった。
>
> 〔…〕しかし、もしもゾフィーの早い死がなかったなら、ノヴァーリスの詩もあれほど美しく神秘的ではなかったであろうと思われる。ノヴァーリスの文学は、彼女の死という鍵によって、生きながら死霊の国へはいることができたのである。
>
> 彼のおもな著作はゾフィーの死んだ年から四年ほどの短期間になされた。そして恋人のあとを追うように三十歳に満たない若さで肺結核で死んだ。ハルデンベルク家の彼の兄弟姉妹も、やはり同じ病で次々に死んだが、ただ詩人の墓だけが神秘な光を放っているのである。[53]

---

[52] 同書 94 頁。なおここで笹沢は「初恋のゾフィー」と書いているが、ノヴァーリスはライプツィヒ大学に在学中 1792 年にユーリエという娘との結婚を考えていたことがあるため誤りである。

[53] 『世界文學大系 77 ドイツ=ロマン派集』筑摩書房、1963、付属『世界文学大系月報 73』、4～5 頁。

阪本はノヴァーリスを天才として紹介しつつ、ゾフィーをも神秘的に描写している。笹沢と斎藤、阪本に共通しているのはゾフィーがノヴァーリスを詩人にするために尊い犠牲あるいは導き手となった、神秘的で特別な美しさを持つ女性とする姿勢である。これは笹沢がゾフィーを『ファウスト』のグレートヒェンの姿に重ねていることからもわかる。

また、同書の解説では**手塚富雄**がノヴァーリスを「純粋さと心情の深みにおいて、ヘルダーリンと共に第一位におくべき詩人で〔…〕二十三歳のとき、十三歳の少女ゾフィー・フォン・キューンと恋におちて婚約したが、ゾフィーがそれから二年後に死んだことは、彼の魂を根底から揺すぶって、死の秘儀と愛の意義に心をひそめさせた。」と紹介している。[54]

先述の月報には該当巻の研究書目・参考文献が付されており、ノヴァーリスの項目には小牧の『ノヴーリス』と丸山の『ノヴァーリス』が挙げられている。[55] しかし、小牧によるゾフィーとの恋愛を神聖視しない姿勢や、丸山によるゾフィーそのものよりもノヴァーリス本人の目に映ったゾフィーの姿が神秘的であったという立場からの考察は継承されていない。

また昭和 42（1967）年に出版された『岩波小辞典　西洋文学　第 2 版』の**谷友幸**によるノヴァーリスの項目を見ると、ここでも

> 1795 年 13 才の少女ゾフィー=フォン=キューンと出会い、烈しい愛情を感じて婚約。彼女が重病にかかって 1797 年死んでから、彼の魂はふかい悲嘆にかられ彼岸へひかれるようになり、この愛と死の体験が彼を詩人にし、その文学を決定的に性格づけた。[56]

と述べられており、ノヴァーリスがゾフィーと出会う以前から詩や小説の創作を行っていたことが無視されている。ノヴァーリスの詩作や詩才はゾフィーに依るものという解釈は、小牧が『ノヴーリス』でゾフィーと死別する以前の作品にも言及した上でノヴァーリスの作品を性格づけているのとは対照的である。

昭和 45（1970）年に出版された『日記・花粉』のあとがきで、訳者である**前田敬作**は

---

[54] 『世界文學大系 77　ドイツ=ロマン派集』筑摩書房、1963、427 頁。
[55] 『世界文学大系 77　ドイツ=ロマン派集』付属『世界文学大系月報 73』11 頁。
[56] 桑原武夫編『岩波小辞典　西洋文学　第 2 版』、岩波書店、1967、112 頁。

ノヴァーリスとゾフィーの関係を次のように書いている。

> フリードリヒ・フォン・ハルデンベルクは、生まれながら詩人ノヴァーリスであったのではない。オルペウスが妻のエウリュディケーを失ったように、かれも愛人ゾフィー・フォン・キューンを失わなくてはならなかった。そして、オルペウスがエウリュディケーをもとめて地下の影たちの世界に降りていったように、かれも亡きゾフィーをみずからのたましいの影の世界にさがしもとめた。〔…〕しかし、オルペウスは、地上へ帰る途中で冥府の掟をやぶったために、ふたたびエウリュディケーを失ってしまった。すべての努力は、無に帰したのであろうか。そうではない。あとに歌のちからが残ったのである。そのようにハルデンベルクも、おのれの影の世界にゾフィーをもとめることによって、詩人に、ノヴァーリスになった。[57]

前田はノヴァーリスを神話上の人物と同一視しており、神秘化という点ではかなり極端な例である。また前田が「夭折者は、死とともにその生を生きはじめ、この死後の生が、かれの生涯と仕事をこのように純粋に完成させたのかもしれぬ。〔…〕そして、夭折者ノヴァーリス――この名前は、すでに一個の象徴であり、神話である。」[58]と述べているように、ノヴァーリスが夭折によって完成されたと考えている。昭和30年代、40年代においてもノヴァーリスの作品と生涯は多くの場合ゾフィーとの関係を軸にして多分に神秘化・理想化されて語られていたことがわかる。

しかし昭和 50 年頃になると、日本におけるこうしたノヴァーリス像の見直しを図る動きが目立ってくる。昭和 49（1974）年に書かれた**久保田功**の「ノヴァーリスの『夜の讃歌』――その構想と展望――」の序文に、このときノヴァーリス像を見直す動きが大きく前進したと考えられる文章がある。

> 夭逝の詩人ノヴァーリスが、新たなアスペクトのもとでとらえなおされ始めたの

---

[57] ノヴァーリス『日記・花粉』前田敬作訳、現代思潮社、1988、226 頁。1988 年はこの本の第 4 刷が出版された年で、ここに引用しているあとがき自体は 1968 年 4 月のものである。

[58] 同書 225 頁。

> は、それほど古いことではない。この詩人像に対する本格的な矯正は、恐らく今世紀に至ってはじめて、急速に施され始めたといえよう。〔…〕しかし、こうした新しいノヴァーリス評価が進められる一方で、旧来のノヴァーリス理解を継承し、この短命の詩人の生と文学のかかわりあいの中にロマン主義そのものの神秘的な化身をうかがおうとする傾向が跡絶えているわけでは決してない。〔…〕新しいアスペクトのもとにノヴァーリス像をとらえる矯正作業は決して容易な仕事ではない。障害の大半はこうした従来からの詩人像の根深さにあるにちがいない。〔…〕彼の生と文学について、mythisch を指摘する場合、次の二重の意味は、あらかじめ明瞭に区別されている必要がある。ひとつは、この詩人の数奇な運命と、時代精神の表象としてロマン主義思想と、それらの文学上の結実産物との間を繋ぎあわせている微妙な測りがたい相関関係に対していう場合。もうひとつは純然たる文学の創造としての世界に対していう場合である。ところが、これらの二つの場合は必ずしも厳格に区別されていない。というよりは、厳格に区別しないことによって一層 mythisch な現象としてノヴァーリスを描出しようとする。従来のノヴァーリス神話はこれらが判然と識別されないまま、彼に対する総合的な性格づけとして一般化された結果にちがいない。[59]

久保田は現在までのノヴァーリス像について「ノヴァーリス神話」という語を用い、それが矯正されつつあるとした上で、今なお旧来のノヴァーリス像が継承されていることを問題視している。こうした事態について久保田はいくつかの原因を挙げているが、特に受容者側の意識を重要視している。すなわち、受容する側がノヴァーリスを生涯や作品ごと神秘化したうえで、そこから生まれたノヴァーリス像への批判をあえて行ってこなかったためにこのような受容の問題が起きているとしたのだ。

また久保田は従来の神秘的な詩人像を改めることを出発点とし、作品をそれ以外のものとの関連性から独立させ、作品そのものに忠実なアプローチを行おうと試みている。久保田はゾフィーとの関わりを中心に据えた従来の『夜の讃歌』の解釈の方法について、次のように批判している。

---

[59] 久保田功「ノヴァーリスの『夜の讃歌』——その構想と展望——」金沢大学法文学部論集文学篇（22）、金沢大学法文学部編、1974、107～112 頁。

> この方法は作品そのものを常にゾフィー体験の残響の中におき、作品の契機でしかないはずの体験に蓄積されたエネルギーの大きさに評価の尺度を求める。作品は人間の解釈の方便として二次的存在を余儀なくされる。解釈をうけた人間像も文学的虚像の色彩を強くにじませる。また作品のただ中に裸身の現実をもちこむことによって、奔放な想像力によって培われた壮麗な詩の天球はたちまちに萎縮の憂目をみることになる。作品に詩人のいわば信仰告白のみを求めることによって、作品そのものの詩的構成は乱され、あるいは無視され、時には歪曲されてしまう。従って作品から直接に詩人の体験レベルを粉飾するための諸形象、諸観念を導きだすという方法は、いまここでは極力避られねばならない。[60]

久保田はゾフィー体験をあくまで執筆の契機に過ぎないとし、それを拡大して作品そのものを体験の影響の中におくことで導かれる解釈は『夜の讃歌』の詩的な構成を乱し、歪曲しさえすると述べている。「十三才にもならない少女ゾフィーがいかようなものであれ、〔…〕この現実の少女を直接作品に持ち込む暴挙は、もはやここでは問題にならない」[61]と述べる久保田は、ゾフィーとの関わりを直接作品解釈の中心に据えようとするあり方に厳しい態度をとっている。

> たしかに、詩人が『夜の讃歌』をひとつの作品として発表した時、彼はそれ以外のものによって何かを主張する方策を捨てたのである。〔…〕作品の中に形成されている詩の世界のひろがりを、詩に附着した独自のイメージの展開として追跡するためには想像力は不可欠のものである。だが、その想像力はテクストの厳格な枠内で行使されねばならない。無規制な想像力がテクストに呈示された作品世界を越えることは許されない。[62]

このように久保田は、解釈の上で想像力が不可欠なものであることは認めつつも、『夜

---

[60] 同 123 頁。
[61] 同 123 頁。
[62] 同 125 頁。

の讃歌』が他のあらゆる事情から切り離され、一個の客観的なテクストとして解釈を受けるべきだということを強調するのである。ここでようやく神秘的なノヴァーリス像の受容とそれに端を発する作品解釈の方法への見直しが図られ始めるのである。

昭和 51（1976）年から 53（1978）年にかけて、**由良君美**の編集・構成による『ノヴァーリス全集』全 3 巻が出版される。これは当時入手が難しくなっていたノヴァーリスの日本語訳作品を入手しやすくし、日本人の特に若い世代の人々におけるノヴァーリス観を育てる目的で出版された全集である。由良は全集第 1 巻の「解説」でノヴァーリスを「その筆名を《ノヴァーリス》といった、ひとりの文学的哲学的なたましいが、不滅の光芒を描いて、ヨーロッパの空に、彗星のような瞬時の軌道を没し」た人物だと評している。

由良の書いたノヴァーリス略伝で注目すべきはゾフィーの扱いである。由良はノヴァーリスの生涯におけるゾフィーと関連した体験の重要性は認めながらも、神秘的なのはあくまでもノヴァーリスの心に結ばれたゾフィーの像であったと指摘している。これは大正期の高尾、昭和 20 年代の丸山らと同じ姿勢である。他方で由良は、ノヴァーリスがゾフィーを観察して書いた文章である『クラリッセ』を引用し、ノヴァーリスが恋をしながらも冷静な観察眼を持ったままであったとして、ノヴァーリスの二面性についても述べている。[63] これは笹沢などの文章に見られるようなノヴァーリスやゾフィーそのものを神秘化し、併せて二人の関係をも神秘化する傾向とは異なる。重要なのは由良によって明治から続いてきたノヴァーリス像が問い直されている点である。

しかしこの『ノヴァーリス全集』の帯ではノヴァーリスを指して「ロマン派の天空を翔けて夭逝した異才」という言葉が使われ、寄せられたコメントにも「天才」や「詩人の魂の不思議な発光の神秘」といった言葉が目立つ。[64] 由良自身も度々ノヴァーリスを天才と形容しており、ノヴァーリス像の見直しを図る一方で従来の神秘的なノヴァーリス像が当時まだいかに根強く継承されていたかが窺える。

同時期に、ノヴァーリスと数学の関係について論じた**柴田陽弘**「ノヴァーリスと数学」がドイツ文学 63 号に掲載された。柴田は「マーティン・ディックは「ノヴァーリスの談笑の脊髄は数学である」と述べている。この言葉はノヴァーリス思想の要諦を衝いているのだが、遺憾ながら、今日にいたるまでノヴァーリス思想に占める数学の意義が正当

---

[63] ノヴァーリス『ノヴァーリス全集 第 1 巻 作品篇』由良公美編、牧神社、1976、426 頁。
[64] 『ノヴァーリス全集 第 1 巻 作品篇』付属帯、牧神社、1976。

に評価されてきたとは言い難い。」[65]と述べ、数学との関わりからノヴァーリスを論じようと試みつつ、同時に数学的観点からの研究が少ないことを懸念している。また、柴田はこうした観点からの研究がなされなかった原因をシュルツやディックの主張をもとに、

> G. シュルツの主張するように、これまでのノヴァーリス著作集の恣意的な編纂方針がこれに依拠してノヴァーリスを論じる評者たちに甚だしく影響を与えてきたためである。M. ディックはこう言っている、「ノヴァーリス研究の 150 年間に、とくに最初の 100 年間に、これら数学断章の重要性を見くびることが習慣になった。」[66]

と説明している。柴田による、研究の進んでいない分野やノヴァーリス著作集の作ったイメージについての指摘は、昭和 50 年代から起こったノヴァーリス像の変化や見直しの動きを表していると言えるだろう。

昭和 58（1983）年、国書刊行会から『ドイツ・ロマン派全集』の第 2 巻として『ノヴァーリス』が出版される。薗田宗人と今泉文子による本書の解説では、「私たちが一般に抱いているノヴァーリス像は、かなり修正されなければならない」として、次のように述べられている。

> （ノヴァーリスが）極めて有能な官吏として職務にいそしんだ人であったことを、私たちは忘れてはならない。貴族の家柄に生まれはしたものの、彼はけっして優雅な文人生活を送っていたのではないのである。〔…〕ノヴァーリスの関心は、現実の政治をいっときも離れることはなかった。古き良き時代を懐古するときも、ノヴァーリスの眼はいつも来たるべき理想的未来を見つめていたのである。
>
> なるほどノヴァーリスは、ひとりの可愛い病弱の少女に恋をした。〔…〕しかし同時に、ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスター』に感激し、またカントとフィヒテの哲学にとらわれて、その研究に熱中していた。たしかに彼は、肺病をわずらって夭折したが、病気が重くなってからも自然科学の勉強を怠らず、職務上の

---

[65] 柴田陽弘「ノヴァーリスと数学」 ドイツ文学（63）、日本独文学会、1979、62 頁。
[66] 同 62 頁。

> 視察旅行に出かけていった。〔…〕ノヴァーリスの生涯と詩は、ハイネの言ったように、死や夢や愛や病気の方にだけ傾いていたのではなく、いつもふたつの面にまたがり、そのふたつのあいだに漂っていた。[67]

と、由良同様それまでのノヴァーリス像を問い直す試みを行っている。[68]

このように、昭和 50 年代になると、細かな差異はありながらも、受け継がれてきた日本における明治期からのノヴァーリス像が大きく見直される動きがさまざまに生まれたことがわかる。小牧や丸山が行っていたような、ロマンチック以外の側面からノヴァーリスを見つめようとする視点が強く意識され始めるのである。

4. 平成期のノヴァーリス受容

平成日本のノヴァーリス受容は、今泉文子の『鏡の中のロマン主義』出版から始まるが、そこでも展開される今泉による日本のノヴァーリス受容の問題点の指摘については、後にさらにまとまった形で展開されるので、そちらでまとめて扱うこととする。

平成 13（2001）年から 14（2002）年にかけて、**青木誠之、池田信雄、大友進、藤田総平**から成るノヴァーリス研究会による『ノヴァーリス全集』全 3 巻が出版された。これはノヴァーリスの作品を清新な日本語に移植したいという思いから生まれた全集である。帯に掲載された川村二郎による「自然科学研究の局面を特に重視して編まれた、全面的な新訳のこの全集」という言葉がこの全集の性格を的確に表している。

この全集第 1 巻収録の「年譜」は、従来の日本におけるノヴァーリスの生涯の紹介に比べ、ノヴァーリスが生涯のどの時期に何からどう影響を受けたかがより把握しやすくなっている。中でも目立つのは、1780 年代以前のノヴァーリスの創作活動に触れてい

---

[67] ノヴァーリス『ドイツ・ロマン派全集 第二巻 ノヴァーリス』今泉文子、薗田宗人訳、国書刊行会、1983、335～336 頁。

[68] また、池内紀による「ノヴァーリスと数学」がこの巻付属の月報に掲載されている。柴田同様数学との関係に注目しており、ノヴァーリスが数学に熱中し『夜の讃歌』執筆のかたわら『数学の讃歌』とでも言うべき断章を数多く残していることにふれている。ノヴァーリス『ドイツ・ロマン派全集 第二巻 ノヴァーリス』付属月報、池内紀「ゲルマンの森から――月報 4、ノヴァーリスと数学」国書刊行会、1983。

る点である。これについては小牧健夫も『ノヴァーリス』の中で触れているが、あくまでこうした時期が存在していたという紹介に過ぎなかった。初期の創作活動についてそもそも無視しているものがあることを考えれば、この「年譜」の重要な特徴であるといえる。またこの「年譜」では、ノヴァーリスが貴族であっても職を得て働いていた点にも注意が向けられている。父と伯父がノヴァーリスを官吏にしようと試みたことやノヴァーリス自身が学問や仕事関連の研究に打ち込んだことにもふれている。これは従来のノヴァーリス像の転換に寄与するだろう。しかし同書第 1 巻の「解題・註」において

> テーマは死の克服だが、ユーリエ・フォン・シャルパンティエと婚約を果たし、対外的により高位の地位を得ようと働きかけていたノヴァーリスが、なぜゾフィーの死後三年近くを経たこの時期に、ゾフィー体験を深化させる作品に取り組んだのかは、文学史上の謎とされる。執筆時期をゾフィーの死のすぐ後までさかのぼらせようとする試みが繰り返されてきたが、今日まで成功していない。その謎をも含め、あらゆる意味で初期ロマン派を代表する作品である。[69]

と、『夜の讃歌』の執筆時期について「謎」ととらえて意味ありげな記述をしている部分には、ゾフィーとの関わりを軸にして作品を語ろうとする従来の姿勢の根強さが窺える。たしかにゾフィーの死後 3 年近く経過してからノヴァーリスが『夜の讃歌』を執筆したことは、「文学史上の謎」とされているが、仮に執筆時機を操作しようという試みが行われてきたとすれば、それは受容者側の理想や神秘を固持するためにあえて事実を歪曲しようとしたということにすぎない。ノヴァーリス自身の思索の結果としての作品以上にその周辺事情や執筆の契機ばかりに着目するのは作品を読む上で障害になりかねないが、そうした態度をまだ引きずっているとも読めるだろう。

平成 18（2006）年には**今泉文子**の翻訳による『ノヴァーリス作品集』全 3 巻が出版された。これは文庫形式としては初めてのノヴァーリス全集である。第一巻の「解題」とあとがきで、今泉は日本におけるノヴァーリスの受容についてふれている。あとがきの冒頭で今泉は

> 二〇世紀の最も鋭く最も感性豊かな思想家のひとりベンヤミンが、いち早く、

---

[69] ノヴァーリス『ノヴァーリス全集 1』青木誠之、池田信雄、大友進、藤田総平 共訳、沖積舎、2001、359 頁。

シュレーゲルやノヴァーリスのドイツ初期ロマン派の芸術批評の仕事を、「認識論的な諸前提」の上に立つものと位置づけ、ノヴァーリスの「醒めた」、「冷徹な」面を説得力をもって強調したのは、一九二〇年のことだった(『ドイツロマン主義の芸術批評の概念』)。爾来、一世紀になんなんとする歳月が経ったわけだが、いまなおノヴァーリスというと、「夜と夢と病いの詩人」という一面的なクリシェが、そのことのもつ真の意味はなにひとつ味験されぬまま、抜きがたいまでの固定観念となっているかにみえる。

とくにこの国では、その感が強い。受容の DNA とでも言うのだろうか。

〔…〕こうして初端からいわゆる「ロマンチック」なロマン主義像が形成されたわけだが、さらに政治的反動期に入ると、ロマン主義は反動思想のなかに取り込まれ、それゆえにまた戦後の批判、軽視、無視にさらされることとなる。そうしてこれらを受けて、今日もなお一般には、「夜と夢と病いの詩人」で、政治的には反動であるとするノヴァーリス像は、根強くつきまとってはなれないかに見える。[70]

今泉はこのように、戦後、とりわけ68年世代以降のドイツにおけるとりわけ革新的な初期ロマン派研究文学研究の成果を踏まえて、日本においてなかなか変わらない保守的でロマンチックなノヴァーリス像に対し全面的な対決を挑んでいる。こうした今泉は、彼女にとってのノヴァーリスの姿を、第三巻のあとがきで次のようにまとめている。

鍛えられた精神と熱狂、あるいは、強靭な理性と神秘的なまでに深い感性――一見すると相反するようなこの二つが、見事に拮抗し、調和がとれているところにこそ、この夭折の詩人の特質があると言えるだろう。哲学や数学や自然科学など学全般に冷徹な思索をこらしながら、たえず「あたたかな想像力」や「心情を刺激する術としての詩」をこれに対置して統合をはかり、神秘や不可思議や熱狂を愛しながら、それに淫しも堕しもせず、これを人間の本来的創造力の開花へと結びつけようとする。役人という職務を忠実にこなしつつ、わずか三、

---

70 ノヴァーリス『ノヴァーリス作品集 1』今泉文子訳、ちくま文庫、2006、440～441 頁。

> 四年のあいだに書き留められた珠玉の詩作と、多岐にわたるおびただしい数の断章や覚書からは、天才的詩人に往々にしてつきまとう妙な狂気の匂いは微塵も感じられないし、「つねに青い空を漂っている」（ハイネ『ドイツロマン主義』）だけの弱々しさもまったくない。あるのは、古今東西の読者を、とりわけ詩人たちを熱狂させてきた深い感性と、今日の優れた思想家たちをも改めて驚かせるラディカルな、すなわち革新的で根の深い、真に総合的な思念だけである。[71]

昭和 50 年代になって緒についた従来のノヴァーリス像の見直しは、平成 10 年代後半になってここにはっきりと、ひとつの形をとったといえるだろう。

その後の個別のノヴァーリス研究についても、見ておきたい。平成 23（2011）年に出版された**森崇司**『ノヴァーリス　夜の想像力考察』では、ノヴァーリスの想像力の観点から、それまでのノヴァーリス受容について語られている。平成 25（2013）年の「自由の希求と無限――ノヴァーリスにおける近代性と非近代性をめぐって――」では、**井上徳仁**が先行研究としてベンヤミンやデリダを引用しつつ、ノヴァーリスの合目的的な側面について論じている。[72] ここで井上はノヴァーリスにおける理想の設定に着目し、それがロマン主義への一般的な見解とは異なる態度で行われていることに言及している。

平成 26（2014）年『あうろ～ら（32）』収録の**高橋優**「ノヴァーリスの感性的宗教――新しい神話としてのハインリヒ・フォン・オフターディンゲン――」は、ノヴァーリスの志向していた楽園への回帰を主軸に、『青い花』のテクストから読み取れる歴史観や宗教観について『断章』を用いながら論じている。ノヴァーリスの思想面でのラディカルさに注目していることが特徴的である。同じく高橋優の「『戦争は地上になくてはならない』――ノヴァーリスの戦争表象について――」[73]も、これまでほとんど全くふれられてこなかったノヴァーリスの戦争表象について詳細に論じており非常に興味深い。高橋は、ノヴァーリスが戦争について言及したテクストを分析し、「戦争」と「永遠平和」という両極

---

[71] ノヴァーリス『ノヴァーリス作品集 3』今泉文子訳 ちくま文庫、2007、419～420 頁。
[72] 井上徳仁「自由の希求と無限――ノヴァーリスにおける近代性と非近代性をめぐって――」東京大学大学院教育学研究科紀要 53 巻、2013、1-5 頁。
[73] 高橋優「『戦争は地上になくてはならない』――ノヴァーリスの戦争表象について――」慶應義塾大学独文学研究室研究年報(32)、2015、67～81 頁。

端の現象を美化・理想化する表象に一貫性を見出そうとしている。論の中ではこれまであまり取り扱われることのなかった学生時代にノヴァーリスが軍人に入隊しようとした経緯や、ロベスピエールへの評価についても言及されている。特に『青い花』を戦争表象から論じるという視点は、これまでのノヴァーリス像に新たな側面を加えたものと言えるだろう。

平成27(2015)年7月に、**今泉文子**訳の『夜の讃歌・サイスの弟子たち　他一篇』が岩波文庫から刊行された。これは平成 18(2006)年に今泉が出版したちくま文庫版のノヴァーリス全集に収録されている作品の訳と解説を新たにしたものである。そのため同書の解説にはちくま文庫版のものと重なる部分もあるが、ノヴァーリスの伝記がより詳細になり、当時の時代背景が非常に理解しやすくなっていること、また国外におけるノヴァーリスの評価を多く紹介していることが特徴的である。こうした情報はノヴァーリスとその作品を理解するにあたり大きな助けとなるだろう。また、以前岩波文庫に収録されていた笹沢美明訳『夜の讃歌　他三篇』の表紙はゾフィーの肖像画であったが、今泉の『夜の讃歌・サイスの弟子たち　他一篇』ではノヴァーリス自身の肖像画が表紙になり、解説にはゾフィーの肖像だけでなく二人目の婚約者ユーリエの肖像も収録されていることも、最近の研究の動向を反映したものと見ることができるだろう。

加藤紫苑は、平成28 (2016)年9月から12月にかけて京都出町柳GACCOH で計3回にわたって「やっぱり知りたい! シェリングとドイツ・ロマン主義」と題する連続講義を行なった。この内の第 2 回「産出的構想力の発見――シェリングの精神哲学」で、加藤はノヴァーリスの魔術的観念論にふれて、次のように述べている。

> ハイネ、鷗外、白秋に典型的に見られるように、ノヴァーリスについて私たちが抱いているイメージには、死と夜の賛美、はかない夢想と情熱、清純な愛と憧れとさすらい、彼方に微光をはなって漂う青い花……というような〈ロマンティック〉な要素が多数まとわりついているように思われます。しかしこのようなノヴァーリス像はあまりにも一面的に感じられます。この講義ではこのような〈ロマンティック〉なノヴァーリス像の再検討を行おうと思います。(1)まずは、ドイツ・ロマン主義におけるメルヒェン文学の復興という現象に注目して、この現象をそれに先立つ啓蒙主義時代の合理主義的・写実主義的な文学に対するアンチ・テーゼとして理解します。(2)さらに、この復興の背後にはカントおよびそ

> の後継者たちの影響があることを示します。[74]

と述べ、従来のノヴァーリス像を一面的な見方だとしたうえでノヴァーリスの思想をカントの『純粋理性批判』との関係から捉え直している。加藤はロマン主義の幻想性についてコルフの説を引用しながらそれが単純な幻想性ではなくきわめて知的な幻想性だったということを指摘している。同講義の結びで加藤は

> 従来のノヴァーリス像は、ハイネの言葉に典型的にあらわれているように、彼の夢想的な側面、幻想的詩人としての側面を強調し、その結果として彼の知的な側面、超越論的哲学者としての側面をとり逃してしまっていました。本講義では、後者の側面の存在を指摘するとともに、二つの側面がノヴァーリスにおいては緊密に結びついている、ということを示そうとしました。[75]

このように加藤は、ノヴァーリスはいわゆるロマンチックな面と、非常に知的な側面との二面性を持った作家だと強調している。

平成期のノヴァーリス受容の締めくくりとして**中井章子**「ノヴァーリスにおける『学問の球体』としてのエンツュクロペディー」[76]におけるノヴァーリスの年譜をまとめた部分を、長くなるが引用したい。

> 以上の年譜をまとめて注目すべき点をいくつか挙げる。
> (1) 貴族ではあるが、役人となって働かなくてはならない立場にあった。
> (2) 宗教的には、敬虔主義(Pietismus)のヘルンフート派の信仰と生き方を実践する家族環境の内に育っている。この時代一般に共通するが、ノヴァーリスの家族や本人自身、病気や死が身近にあり、病気や死に際して宗教的な面が表面に現れる。Lavater や Jean Paul などの作品に見

---

[74] 加藤紫苑「<講義> 詩と哲学 ――ノヴァーリスと産出的構想力』Prolegomena：西洋近世哲学史研究室紀要 8（1）、2017、4 頁。

[75] 同 14 頁。

[76] 中井章子「ノヴァーリスにおける『学問の球体』としてのエンツュクロペディー」研究報告論集 Credo Ut Intelligam、第 4 号（最終号）青山学院大学総合研究所キリスト教文化研究部 研究プロジェクト「キリスト教大学の学問体系論」2014、13～20 頁。

られる死者の世界との対話に親しみ、自己との対話である「日記」も残されている。

(3) ノヴァーリスは早く亡くなったため、Frühromantik で終わっている。時代としては、ナポレオンによる占領より以前、19 世紀以降重要となるナショナリズム的「ドイツ」意識は、のちの受容史において読み込まれたものである。

(4) 三つの大学で、歴史や哲学や文学を学び、同時代の書物(ゲーテ、シラー、ヘルダー)と対話している。

(5) テクノクラート、職業人であって、大学人ではない。行政職につき、鉱山の工学的マネージメントを担当している。そのために、フライベルク・鉱山アカデミーで最先端の数学、物理学、化学、地質学、岩石学、鉱物学などの自然科学を基礎から総合的に学んでいる。地質調査に携わり報告書を書いている。

(6) 詩、小説、文学論、哲学、歴史哲学の著作を残している。哲学では、「断章集」というスタイルをとっている。

(7) 哲学としては、カントとフィヒテとヘムステルハウス(オランダのプラトン流哲学者)から出発している。

(8) 若きヘルダーリン、シェリング、ヘーゲル、シュレーゲルの同世代であり、フィヒテから出発して、「自然」や「全体」を視野に入れる思考に共通性が見られる。

(9) 初期ロマン派のグループに属し、雑誌『アテネーウム』に執筆している。このグループでは女性が重要な役割を果たしていた。小規模な家庭的サロンであり、このなかで作品を朗読したり、一緒にドレスデンの美術館を見学して文章を書いたりしていた。この集まりの表現として雑誌『アテネーウム』があった。サロンと結社 Gesellschaft という形をとった知的な「場」であった。[77]

中井がここで試みているのは作品論ではなくノヴァーリス本人についての伝記的研究のまとめであるが、もちろん作家の伝記的研究にも十分な価値がある。そして中井はここでノヴァーリスを考える上で重要と思われる要点を、非常にバランスよくまとめていると思われる。これを見てまずわかることは、ゾフィーとの関係がノ

[77] 同 15〜16 頁。

ヴァーリスの生涯と作品の中心だという見方がもはや消えつつあるということである。そもそもノヴァーリスという詩人にとって、それ以外にも重要なことが数多く存在したことは、さまざまな研究によって明らかになってきた。ここでそのすべてをあげることはできないが、文学の関連ではシュレーゲル・シラー・ゲーテとの出会いこそが一番の衝撃だっただろうし、思想面でいえばフィヒテやカントの影響が最も大きかっただろう。実務の面ではユストやヴェルナーが一番の師であり、ノヴァーリスとその作品とはあくまでもそれらが総合的に合わさって生まれた産物である。他にも家庭環境によって培われた宗教観、大学での学び、ゾフィーとの恋愛、数学をはじめとする自然科学また思想哲学への深い思索、職務への忠実さなど、どれを取り除いても今日遺されているようなテクストを生み出すことはできないことが、中井のまとめから見て取ることができる。ノヴァーリスのテクストは、彼が学びかつ習得しようと試みた全ての事象を複雑に組み合わせて構成したものだった。それならば、のちにノヴァーリスや作品について論じる私たちもまた、あらゆる面から彼と彼の作品を見ようと試みるべきだろう。そしてそれらの集合によってモザイク画のごとく人間ノヴァーリスの像を浮かび上がらせてゆくことにより、彼の作品の理解にも少しずつ近づくことができるものと思われる。

おわりに

ノヴァーリスについて何が正しく、何が虚飾であるか、事実関係は当然ながら時代が下るにつれてどんどん判断が困難になってゆく。ノヴァーリス自身はもちろんのこと、作者と交流があった人々が亡くなって久しい現在、その人となりを知るには評伝などといった間接的な方法しか取りようがない。ユストの書いたノヴァーリス伝のように比較的事実に即していると思われるものもあるが、ティークの『ノヴァーリスの想い出』のように、多分に神格化されていると思われるものもある。それらがどこまで事実を描いているのか、後世の我々が客観的に判じることは多くの場合難しい。それ以上に、本人不在の中で、読者の数だけ存在するとも言えるノヴァーリス像に「正しさ」を求めることは原理的に筋違いでもあるだろう。にもかかわらず、こうしてノヴァーリス像の変遷を改めてみてみるならば、さまざまな読者がノヴァーリスに何を求め、読み込んできたかの多様な歴史を振り返ることができるとともに、他方で正確にテクストを読み込む学術の蓄積に

より、長年受け継がれてきた解釈やイメージの中に埋もれてきたノヴァーリス文学の「実態」に時を超えて迫ることができる可能性も垣間見ることができるように思われる。

中でも日本においてノヴァーリスのゾフィーとの悲恋や天才性、夭折といった一種ドラマチックな印象を与えるエピソードが求められてきた歴史を見ると、明治以来の多くの日本の読者が、作品と、それ以上に作者とその恋人に、実態を超える物語性を付与し、だからこそより魅力的に受容されてきた経緯が浮かび上がる。そこに読者たちの強い願望が投影されていたからこそノヴァーリスの根強い人気がこれまで続いてきたとするならば、実証的な研究の成果は、皮肉なことにノヴァーリスへの関心そのものを低下させてしまいかねない。おそらく現代のノヴァーリス研究者たちも、自らがノヴァーリスに惹かれてきた経緯を振り返りながら、その葛藤と闘っているのではないだろうか。本論の下敷きになり、また何度も取り上げてきた今泉文子も、一方では例えば『ロマン主義の誕生　ノヴァーリスとイェーナの前衛たち』(平凡社、1999)の中で、そこれまでのノヴァーリス受容 の仕方に改めて疑問を投げかけている。[78] しかし同じ今泉が同書の中で、ノヴァーリスや Fr.シュレーゲルなど、ロマン派とその周辺人物の会話や思考を一部創作して次のような想像をめぐらせているのは、意外なことにも思われる。

> ハルデンベルクは茫然自失してしまった。〔…〕最愛のひとが苦しむ姿だけが脳裏に焼き付いてはなれない。化膿した傷の痛みにうめくゾフィー、小さなやせた体を折り曲げて咳の発作にあえぐゾフィー……。[79]
>
> ティークはヴァッケンローダーとの日々を思い出していた。「疲れちゃった……」そう言ってヴァッケンローダーは組んだ両腕の上にうつぶせていた顔を振り上げた。〔…〕かれの繊細な感受性は、こうやって音楽を聞いたあとでもすっかり消耗してしまうのである。[80]

同書の内容は実際の書簡や日記などに取材しており、にもかかわらず今泉がノヴァー

---

78 今泉文子『ロマン主義の誕生 ノヴァーリスとイェーナの前衛たち』平凡社、1999、11頁。

79 同書 129 頁。

80 同書 222 頁。

リスの「内面」をも創作するようなことをしていたことについて、今泉自身、同書のあとがきで次のように述べている。

> 文学・思想現象を「物語」として語ってしまうことへの誘惑と抵抗――そのせめぎあいのなかで、本書はとりあえずここにあるような形となった。[81]
>
> ロマン主義を、若々しい精神の運動として物語風に描いてみるという試みは、〔…〕言葉のうちほんのごく一部を選んでそれらをつなぎあわせ、ひとつのものとして構成していく――そこには、ロマン主義者自身が嫌うようなあやしさが本来的につきまとうからである。〔…〕取り上げたものの中にも筆者の誤解や間違いもあるであろう。[82]

今泉は、ロマン主義を物語的に書くことに対してむしろ批判的な立場にたち、従来のノヴァーリス解釈に最も批判的に距離を取ってきた研究者である。それだけに、同書が評伝的な要素を含んでいるとはいえ、やや過度にドラマチックな感性的解釈をその中に書き加えずにいられなかったあたりに、ノヴァーリス研究が現在立っている難しい地点がうかがわれるようにも思われる

長きにわたって日本におけるノヴァーリス研究を牽引してきた今泉の功績は大きい。あらゆる観点からノヴァーリスの考察を行ってきた今泉も、しかしすでに他の研究者からの批判に晒される立場にある。例えば**高橋修**は、今泉の著作『ノヴァーリスの彼方へ　ロマン主義と現代』(勁草書房、2002)に対する書評で、「著者はノヴァーリスの世界から、様々な要素を削ぎ落して、一つの現代人向けのノヴァーリス像を整序していないだろうか。〔…〕実験的宗教性と、認識論や存在論との格闘はノヴァーリスの魅力の重要な構成要素だと思う。」[83]と疑問を呈している。このように、今泉が主に明治期から平成に至るまでの日本におけるノヴァーリスの受容史を詳らかにし、平成末期に中井が簡潔で総括的なノヴァーリス像を示した後もなお、日本におけるノヴァーリス像はさらに問い直され、変化し更新され続けていくことだろう。

---

[81] 同書 307 頁。
[82] 同書 309 頁。
[83] 高橋修「書評　今泉文子『ノヴァーリスの彼方へ　ロマン主義と現代』」ドイツ文学(116)日本独文学会編、2004、69～71 頁。